

清瀬四小特色ある学びの構想図

【学習指導要領の趣旨と取組の課題】 ●人間として調和のとれた育成 ●社会に開かれた教育課程 ●カリキュラムマネジメントの推進 ●育成すべき資質・能力の明確化 ・生きて働く知識・技能の習得 ・思考力・判断力・表現力等の育成 ・学びに向かう力・人間性の涵養 ●主体的・対話的で深い学び （アクティブ・ラーニング） ○個別最適・協働的な学習 【本校の課題】 △「子供を主語」にした授業づくり △保護者・地域との教育資源の活用	【学校の教育目標】 素直な明るい元気な子（人間性） 仲良く力を合わせる子（協働性） よく考えやり抜く子（自己実現） 自然に親しむ子（自然との対話） 【児童の実態と課題】 ○人懐こく素直に応じて行動する姿が多い。 ○上学年が、下級生の面倒を見る姿が多い。 ●学力調査の結果、漢字の書きや、図形問題、記述式の問題に苦手感を抱える児童が多い。 ●わかったつもりでいることが多い。 ●自分の言葉で伝えること、振り返ることがままならず、自信のない姿が見える。	【清瀬市教育委員会が示す資質能力】 ①生きて働く知識・技能 ②未知の状況でも活用できる思考・判断力・表現力 ③生涯に渡って学び続ける力、人間性 ④故郷清瀬を誇りとし持続発展の主体者となる力 ⑤自他の命を何よりも大切にできる力 学習指導要領における言語活動の位置付け （小学校学習指導要領「総則」） ●言語能力、情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力の育成 ●各教科等の特質を生かし、教科等の横断的な視点からの教育課程の編成
--	--	---

今までの取組

1 分間スピーチ 詩や俳句の暗唱 清四漢検 読書貯金
俳句・短歌づくり 言葉の宝物掲示 5分間メモ 日記 授業の振り返りメモ 全校音読発表 あいさつ隊運動

教師の願い・期待

・考えたことを、言語化できる子に。
・挑戦したことをあきらめない子に
・人との関わりでよりよく調整する子に

児童の苦手感と育てたい言語力像

低学年	中学年	高学年
△語彙が少ない。△単語で話をする。△気持ちや言葉をすることが困難。 △話があっちこっちにいく。	△語彙が少ない。△思いを言葉にできない。△話の内容を正しく聞き取ることに困難さ。△話題からそれた受け答えになりがち。	△語彙が少ない。△話型がないと自信をもって話し合うことができない。△うなずきながら聞いているが、その話の意図を理解したり、つなげて考えを広げたりが難しい。
○思ったことを順序よく話せる子 ○目を見て話を聞き、つなげて対話する子	○相手に伝わるように言葉を選んで話す子○他者の様々な考えを受け止めながら対話する子	○相手の考えを受け止めて、そのもととなる理由を尋ね合う子○相手と自分の考えを比べながら聞き、自分の考えをまとめる子

【教育的課題】（文部科学省・「言語力育成のための教育内容の改善について」より）
言語は、学習の対象であると同時に、学習を行うための手段である。学習で用いる言語を精査し、**国語科を中核としつつ、各教科での言語の運用を通じて、種々の能力を育成するための道筋を明確に**していくことが求められる。

生きて働く言語力の育成

【各教科等の具体的な言語活動例】

【国語】 自分の考えを相手に分かるように伝え、交流・共有で伝え合う力を身に付ける。文章のキーワードを抽出したり、要約したりして読解力を養う。
★各教科ではその「教科用語」を使い、対話的説明でのアウトプット活動を重視。
【社会】 社会的事象について、理解したり、考えたりしたことをまとめ発信する。
【算数】 算数用語を用いて自分の言葉でまとめ、分かりやすく説明する。
【理科】 問題を見出し、予想、観察、実験し、自分の言葉で整理しまとめ発信する。
【生活】 振り返り表現する機会や伝え合い交流する機会の場を充実させる。
【音楽】 互いの演奏についてペア交流を通して、その表現方法を共有する。
【図工】 感じたこと、やりたいことを自分の言葉でまとめ、互いの着想の良さを話し合い認め合うようなペア交流を充実させる。
【家庭】 生活の工夫について、伝え合い、実践したことを報告する。
【体育】 筋道立てた練習計画、方法や作戦を考え伝え合い調整を図り技能を高める。
【外国語】 自分自身や周りの人、出来事について英語で表現する楽しさを伝え合う。
【道徳】 自分の考えを基に対話し、議論と振り返りと共感・共有をする。
【総合】 自らのテーマを探究する活動を通して、情報交流し、まとめ、発信する。
【学活】 必要感のある議題について、「合意形成」を目指す議論をする。

言語力を支える取組

●読書活動の充実（**読みたい！**）
⇒「読書タイム」（毎日、朝読書 15 分間）や地域人材の読み聞かせ
⇒お昼の放送で読み聞かせ・推薦本の紹介。放送委員の読み聞かせ（**聞きたい！**）
⇒地域図書館から毎月の団体貸出による「学級文庫」の充実。
⇒「読書カード」の活用、学校図書館の活用
●「清四漢検」の実施（**書きたい！**）
⇒1 年から6 年までの漢字のマスターが目標。1 0 2 6 文字の習得、習ったら使う。
●ペア交流の充実（**アウトプットしたい！**）
●教科書の詩の音読・暗唱等の音声言語で表現する。スピーチをする。（**発表したい！**）
●国語辞典の日常的な活用（**知りたい！**）
●夏と冬の「清四っ子俳句大会」の実施
⇒地域の俳句名人の出前授業

令和7年度 ホンとのチカラ 清四小



本校の教育課題の第一は、生きて働く言語力の向上である。点数化された学力にとどまらず、それを基盤にすることによって、他教科・領域の学習、さまざまな行事の場面、さらに日常生活に至るまでを視野に入れての取組である。

そこで、児童が最後まで粘り強くやり切り、達成感を繰り返す姿に着目した。それが「学びに向かう力」を養うことになると信じているからである。しかし、児童のここ数年の状況はどうであったろうか。それを直視したときに、教育する側としての反省とともに、今も、その必要感に迫られている。

「必要は、発明の母」とは、先人の言葉。新たな知識や技能は、文化という器に蓄積され熟成され継続的に更新されていくものである。学校文化として、何を大事にしていくのか、そこが今、問われているように思えてならない。何のために学校はあるのか、学校は果たしてその目的を保護者や地域と共有し、成就感を得ているのか、という「問い」は常に念頭に置かなければならない。「温故知新」や「不易と流行」とあるとおり、先人の生き方、知恵に学ぶことを心に留めおくことは、私たちの今と未来を大切にすることである。

日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士は、幼いころからあることが日課であったという。それは、「素読」であり「音読」である。「読書百遍意の自ずから通ず」をまさに体現された先人である。書物には、易しいもの、難しいものなどの難易度がある。難しい内容でも、それを声に出して読み、じっくりと考える。心静かに黙読し、また考える。時を超えた作者との対話の中から、大事な何かを汲み取り、気づき、感得した瞬間の知的な感動は、しっかりと心に染み渡り、柔らかく脳の中に刻まれ、次の知識欲を掻き立てる。そのような体験を積み重ねることによって、人は、よりよく伸びやかに人間形成を成し得ていくのだらうと希望の未来が想像される。

私たちの大先輩たちは、書物から知識を吸収し増やし、さらに発明をもたらし、生活をよりよくし、社会をよりよくしてきたのであった。まさに書物は、人類の英知の源泉である。

小学校の段階は、その入り口である。今このときに、多くの書物と出あい、よりよい言葉を獲得し、「言葉とともに生きるチカラ」を豊かにと思う。「学び」への喜び・楽しみ、人間性への感動を心ゆくまで味わわせたい。また日常の授業にあっては、校内研究を軸に「学びを深める楽しさ」を児童同士が共有する“対話”のあり方を追究してきた。“対話”なくして主体的な学びなし、との思いが今の本校の実感である。児童が実感したそのチカラこそが「ホンとのチカラ」となり、激動の社会を生きる礎になると信じている。

清瀬市立清瀬第四小学校